

# 近代気象学の先駆者・中村精男（上）

## —吉田松陰と松下村塾の影響を踏まえて—

牛見 真博\*

### Kiyoo Nakamura, Pioneer of Modern Meteorology; the first half : Based on the Influence of Shoin Yoshida and Shoukason-juku Academy

Masahiro USHIMI

#### Abstract

Kiyoo Nakamura used to be a student at Shoukason-juku academy (private school run by Shoin Yoshida), and then made a decision to major in physics and meteorology. He served as the director of the Central Meteorological Observatory (Japan Meteorological Agency in the present day) and devoted himself to establishing the modern meteorology. In addition, he was also known as one of the founders of the current Tokyo University of Science. Previous studies have neither clarified what motivated him to specialize in physics and meteorology nor how his life was influenced by what he learned at Shoukason-juku academy in his boyhood. Thus, this paper aims at delving into details of Kiyoo Nakamura to promote deeper understanding of his personality.

**Keywords :** Kiyoo Nakamura, Meteorology, Shoin Yoshida, Shoukason-juku

キーワード : 中村精男, 気象学, 吉田松陰, 松下村塾

#### 1 はじめに

中村精男（1855-1930）は、吉田松陰（1830-1859）亡き後の松下村塾に学んで物理学、さらに気象学の道に進み、中央気象台の第三代台長などを務めるとともに、わが国の気象学分野で初めて理学博士号を授与された人物である。また、東京物理学講習所（東京理科大学の前身）の設立に尽力した一人でもあり、後身の東京物理学校では明治29年（1896）2月から昭和5年（1930）1月に亡くなるまで、じつに34年近くの長きにわたり校長を務めた。

従来、一次資料の少なさもあり、中村精男について伝えてくれる記述は経歴の大枠を伝えるもの<sup>1)</sup>、関係者による後の回想の類に限られる<sup>2)</sup>。そのため、そもそもなぜ松下村塾から物理学、さらには気象学の道に進んだのか、また少年時代に松下村塾で学んだことが、その後の人生にどのような影響を及ぼしているのかなど、筆者の関心ある内容について伝えてくれるものはなく隔靴搔痒の感があることは否めない。

本稿はそうした現状に鑑み、中村精男について断片的なものを含む種々の記述を収集することに努めながら、必要に応じて周辺事情などの加筆を試みることで、その人物理解を現状より掘り下げていくことを意図するものである。

#### 2 松下村塾時代から上京まで

中村精男は、安政2年（1855）4月19日、長門国阿武郡椿郷東分村に、藩士中村桑吉の長男として生まれた。名を「孫市」と称していたが、後に「清男」と届け出た際、役所の転籍係が誤って「精男」としたという<sup>3)</sup>。生涯にわたり「精男」で通し、後年、書をものする際には、「精」の字を分けた「青米」の落款を用いている<sup>4)</sup>。

10歳頃から松下村塾に通っていたようだが、それは吉田松陰がすでに亡くなった後のことである。中村は、自身が通っていた当時の松下村塾について次のように回想している。

\* 一般科目

当時青年塾生は大抵奇兵隊などになつて山口や馬関に出て、所謂天下を股に掛けて奔走して居つたので、塾には吾々の如き子供許りであつた。然し塾をあつて置いてはならんと云ふので、眞島と云ふ青年が奇兵隊から抜けて帰つて来て塾長になつた。塾長と云つても漸く二十歳位の青年で、此の塾長が上の生徒を教へ、上の生徒が吾々の如き小供を教へると云ふ訳であつた。……当時の教授は無論個人教授で、一人々々都合の善い時に学ぶ様になつて居たから、生徒同志間には知らずに過ぎるものが多かつた<sup>5)</sup>。

この資料で「眞島」と見えるのは「馬島」の誤植であり、当時の中村が師事した馬島甫仙(1844-1871)のことである。吉田松陰が萩の野山獄に入獄していた際、「甫仙足下、村塾の主持、僕實に足下に委す<sup>6)</sup>」として、松陰から松下村塾の後を託すとされた人物であり、実際に松陰亡き後、慶応元年(1865)から明治3年(1870)まで松下村塾で教鞭を執った。馬島は、久坂玄瑞(1840-1864)、高杉晋作(1839-1867)といった主要な門下生のうちの一人で、奇兵隊では書記や読書掛を務めるなど文事に長けた人物であつた。明治2年(1869)6月、その馬島が松下村塾時代の中村精男を評した記述が残る。

生年僅十有五、面没読書、不好遊戯、諸友啗啗称揚不已、予亦頗愛焉<sup>7)</sup>。(生年僅か十有五、面は読書に没し、遊戯を好まず、諸友啗啗として称揚すること已まず、予も亦た頗る焉を愛す。)

短評ながら、当時15歳の中村の学問への姿勢や周囲による評価の高さ、そして馬島による期待のほどが窺える。

また翌3年8月7日付の「書雄魂雑書東行前日記後贈中邨執中」(雄魂雑書を書す。東行前日に記して後、中邨執中に贈る)は、馬島が松陰門下の盟友で当時兵部大丞だった山田顕義の誘いにしたがって上京する前日に記し、中村精男に贈ったものである。馬島は、中村の学問に取り組む姿勢を次のように賞讃している。

中村生執中、読書之癖、美学礼、無好残書、其所抄、褒然而積為数十卷之多、其技最可畏<sup>8)</sup>。

(中村生執中、読書の癖、学礼に美れ、残書を好むこと無く、其の抄する所、褒然として積むこと数十巻の多と為し、其の技最も畏るべし。)

「執中」の語は、『論語』や『孟子』に見られる。こうした表現は、「中を執る」(中庸の道を守る)という馬島による中村の人物評でもあり、高潔な人柄を称揚したものである。それに続き、中村の読書量が膨大で読み残しを嫌い、抜き書きしては学問を

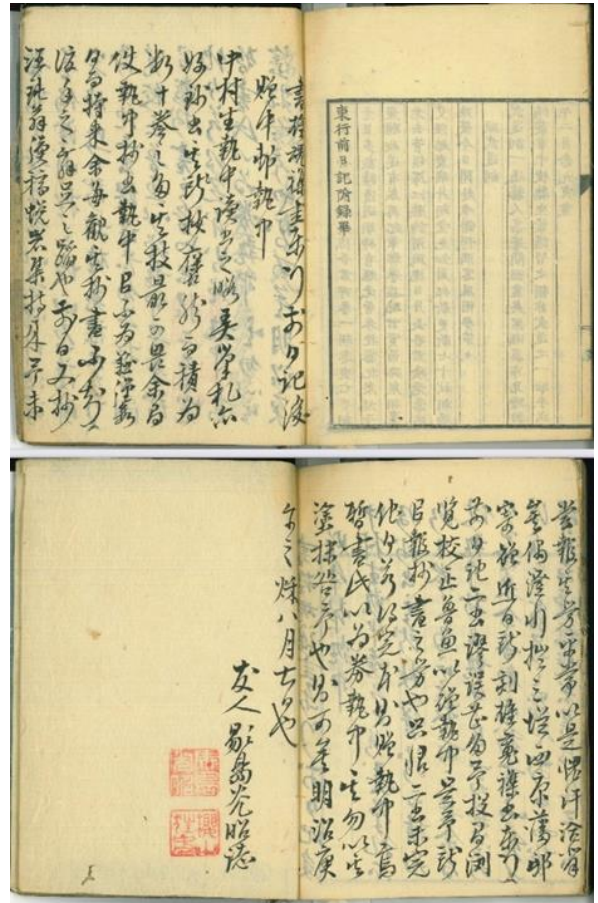


図1 中村精男蔵書の馬島甫仙自筆「書雄魂雑書東行前日記後贈中邨執中」※末尾に「友人馬島光昭誌」とある。(東京理科大学近代科学資料館蔵)

積み重ねた成果が数十巻に及んでいたことが分かる。

馬島の上京後、後任の塩田寅輔が継いだ松下村塾には、同年10月28日、閏10月23日、24日に通塾したようだが、これ以降の記録は見られなくなる<sup>9)</sup>。

時期的には中村自身が必要な独習を進めるなど上京の準備に入ったものと推察される。師の馬島は当初、山田顕義の度重なる誘いに対して、「郷関の子弟と別るに忍びず<sup>10)</sup>」と容易に応じなかったようであるが、見方を変えると馬島の上京に伴い、中村にも上京の決意が生まれたか、あるいは馬島による勧めもあったのかも知れない。

また、中村の上京が父親にとっても強い意向であったことを窺わせる次のような記述もある。

厳父は同藩の土屋氏未亡人の健げにも一子を遥かに東都に遊学せしめらるゝを聞き大に之に刺激せられ、直ちに先生の東京遊学を決行し同時に躬らは御目附役の随伴となり岡山県の笠岡に赴かれ、大に先生の為めに苦難を積まれたり。……年齒僅かに十六なりしも此厳父の決死の大精神を体得し、土屋、熊野両氏の子息等と共に

に、勇躍、東上の途に就かる、時に明治四年なりき<sup>11)</sup>。

明治4年(1871)11月、中村は、熊野敏三、土屋政之允とともに上京している。

### 3 フランス語選択の理由

上京した中村は、築地にあった明治協会でフランス語を学んだとされる<sup>12)</sup>。今となつては明治協会という組織なり存在そのものが判然としないが、次の教育機関に進むための予備校的側面が強かつたものと思われる。

当時、築地は軍艦操練所など海軍の拠点であったことから、フランス人から直接学ぶ環境もあったと思われ、一緒に上京した熊野敏三もフランス語を学んでいる。

先行研究では、そもそも中村がなぜフランス語を学ぼうとしたのかについては等閑視されており、それに言及しているものはない。松下村塾で、松陰門下の馬島甫仙から薫陶を受けた中村が、自らの将来をどのように描こうとしていたのか。吉田松陰による影響を視野に入れながら考えていきたい。

吉田松陰に端を発する海事志向の影響が、幕末から明治の初めにかけて松陰門下生を中心に波及していたことについては別稿で論じている<sup>13)</sup>。

松陰の海事志向の一例として、安政5年(1858)の「統愚論」には、海事の隆盛が国の発展につながるという意図から、自らの大学校構想の中で、いわゆる航海学科の設置や航海実習を次のように提言している。

航海の事、一口に航海航海とのみ申し候へば、極めて成り難き事に相聞え候へども、是れを行ひ候は夫々順序之れある事に御座候。航海は一科の学に相成り居り候事に付き、学校中へ此の学所一局相建て、其の学に長じ候もの入学仕らせ候儀一説に御座候。又吾が国の航海、東北蝦夷・松前より西南対馬・琉球まで、自在に通船致し候事に候へども、只今の所にては専ら船頭舳子の事に成り果て候故、武家の士にても此の術を会得致し候もの之れなく、況して公卿の歴史をや。夫れ故学校中にて人材を選び、二十左右少壯の者を諸国の港々へ遣はし通船に託し、海勢並びに船上の事心得させ、又志あるもの十歳左右の童兒をも丸に船頭に託し置き候事勝手に致させ、専ら其の術を精究致させ度く、是れ等も皆公卿より御引立成され候事、是れ二説に御座候。和蘭陀は二百年來航仕り候事にて、墨夷其の外新來の夷国とも違ひ、且つ往々御国

の御為めを謀り候事に付き、此の船に託し壯士數十人づつ年々広東・爪哇(ジャワ)其の外へ御遣はし成され候事、是れ三説に御座候。此の三説を以て航海の基と成され候て、清国・朝鮮・印度杯の近国へ出掛け候様成され候はば、数年の内航海の事は大に行はれ申すべく存じ奉り候<sup>14)</sup>。

大学校においては、「航海」で一学科を置き、二十歳前後の若者を船に通じさせるとともに、十代で志ある者も船に馴れさせて航海術を身につけさせよとする。また、オランダ船に託し毎年数十人づつを近隣諸国に外航させることなどを通して数年内に我が国の航海術も盛んになると説いている。

松陰門下の一人で慶応3年(1867)からアメリカ、イギリスへ渡って造船を学び、帰国後は工部省に入り、官営長崎造船所第二代所長(後に長崎造船局となり初代局長)を務めた渡辺蒿蔵(天野清三郎、1843-1939)は、後に次のように回想している。

私は高杉、久坂其他の人の様な働きは出来ぬ、愚痴であつた。併し松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた故、船大工なら私にも出来ようと思つて、慶応三年ロンドンに渡つた。これが船に関することに身を致すに至つた所以である<sup>15)</sup>。

松陰の「造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬ」という海事志向に加え、長州では英学志向が濃厚に存していた。そうした中で、中村がフランス語を選択した理由はどのようなものであつたのだろうか。

当時、フランス語を学んだ者の進路としては、主に横須賀造船所、司法省、陸軍諸学校の三つで、幕末・明治期の外交政策の中でフランスの学術が採用された分野であつた<sup>16)</sup>。そうした選択肢の中から、中村も当初は、「造船」「造艦」の分野を念頭に置いていたのではないかと筆者は考えている。それはたとえば、長州ファイブの一人で後に工部省設立に尽力した山尾庸三(1837-1917)が、イギリスで造船をとおして工学全般を学ぶことを意図したように、中村もまた造船をとおして理学を学ぶことに関心を有していたのではないか。松下村塾時代の中村について理学への関心を示す資料は見当たらないが、吉田松陰は、算術の重要性について次のように説いている。

学者は算術を卑み、士も亦すべき事でない、と心得る者がある、是は大變な間違で、聖人も六芸の中に数学を加へた位で、人生の最大必用物

である<sup>17)</sup>

松陰亡き後の松下村塾においても、こうした考え方から漢学以外の理学を重んじる遺風があったとしても不思議ではない。

ちなみに、松陰門下の高杉晋作が、文久2年(1862)の上海視察の際に、イギリス人宣教師のもとを訪れ、「数学啓蒙」「代数学」等の数学書を購入していることも、松陰の影響を感じさせ興味深い<sup>18)</sup>。

自然科学への興味関心を抱いた中村が、上京してフランス語を選択した理由の一つとしては、進路先の候補に横須賀造船所を視野に入れていたからと思われる。横須賀造船所は、仏・ヴェルニー(Verny: 1837-1903)が責任者として「エコール・ポリテクニク」による教育が構想されていた。「エコール・ポリテクニク」は、一般的には「理工科学校」と訳される専門の科学教育機関であり、それが当時の横須賀造船所内に設置された「覺舎」(横須賀覺舎)である。

同舎における1867年のカリキュラム案には、3年の就学期間に、第1学年は「算術」、「幾何学」、「製図」、「物理学」、「宇宙形状誌」、「仏文学」、「画学」、第2学年は「算術補足と三角関数」、「幾何学補足と画法幾何学」、「力学」、「物理学」、「化学」、「動植物学」、「仏文学」、「画学」、第3学年は「力学補足と材料抗耐学」、「立体学」、「化学」、「一般建築学」、「造船学」、「機械製作学」を学ぶことが示されている。そして、この基礎教育の後には、ヴェルニー自身が学んだシェルブールの海軍工兵応用学校へ留学させる接続教育を考えていたとされる<sup>19)</sup>。

明治維新後の混乱に伴い一時中断していた教育構想が本格的に展開したのは、明治3年に横須賀覺舎が再開してからになるが、松下村塾で学んでいた中村は広く理学を学ぶことのできる進路先の一つとして、そうした教育機関の存在について情報を得ていたことが考えられる。

興味深いのはこうしたエコール・ポリテクニク教育は、安政5年(1858)に吉田松陰が長州藩主毛利敬親に献策した工学教育論とも相通ずることである。松陰の工学教育論とされる「学校を議す 付、作場」からその一部を掲げてみたい。なお、訓読および大意については三宅昭宣氏のものに拠った<sup>20)</sup>。

読書の士、率ね空疎多し、齊の稷下鑿みるべきなり。故に余謂へらく、作場を起し之を学校に接続するに若かざるなりと。船匠・銅工・製薬・治革の工、凡そ寸技尺能ある者、要は皆宜しく治事齋に属すべし。今これを作場に湊聚し、衆知を合せ巧思を広め、船艦器械を講究せば、必ず成る所あらん。(読書の士は、おおむね空疎

の人が多い。そこで私は、作場を起し、これを学校に接続するのが良いと思う。船匠・銅工・製薬・治革の工など、およそ少しでも技能のある者は、才能を達成するようにすべきである。今これを作場に集め、衆知を合せ、巧みな考えを広め、船艦・器械について講究すれば、必ず達成できるだろう。)

先に触れたエコール・ポリテクニク教育の具体案と比較すると抽象的な感は否めないながらも、次のような重要な視点が含まれている。三宅氏は、「学問と工学が接続すれば、双方に便宜がある」ということについて、「特に学問をやっている人たちが実務、実際の工学を取り入れることによって空理空論を脱却していく」ことを求めたと指摘している<sup>21)</sup>。

ここでも松陰は、「船艦器械」の講究を掲げているが、松陰のこうした学校構想は、事あるごとに門下生たちに語られていたことは容易に推察され、松下村塾を承継した馬島甫仙もまた例外ではなかったであろう。ただし、松陰がこの献策をした安政5年の時点では、松陰自身が「余の学校作場の説を聞かば、必ず愕きて以て異と為さん」と懸念しているように、実現以前に、構想自体の理解を得ることも難しいであろうと述べている。

しかし、先に触れた横須賀覺舎のような、松陰による工学教育の構想がより具体化した、基礎教育と工学技術教育の双方を学べる場があるとすれば、松下村塾なり萩城下でそうした情報を高揚感をもって受け取る若者がいたとして何ら不思議ではない。吉田松陰にはじまる長州における海事志向や造船分野への関心が、中村の進路選択のきっかけとして大きな影響を与えたものと思われる。

#### 4 東京大学仏語物理学科と物理学講習所創設

明治4年11月に上京した中村は築地の明治協会でフランス語を学び始めたが、この時点で中村の進路の選択肢には新たに受験資格の門戸が開かれた、後の東京大学につながる「南校」が加わることになった。そして結果的には造船分野の横須賀覺舎ではなく、「南校」に進むことになる。

一方、中村とともに上京した熊野敏三(1855-1899)は、当時フランス語を学んだ者の主な進路の一つであった司法省の明法寮に進み、後にフランス留学を果たし、パリ大学で日本人初の法学博士号を授与されている<sup>註1)</sup>。帰国後は、同時期にフランスに留学し法学を学んだ人々により創設された明治法律学校(明治大学の前身)の教育にも携わった。熊野もまたフランス語選択が拓いた進路を歩んだと言えよう。

さて、中村が学ぶことになる後の東京大学理学部仏語物理学科の前史については、小澤健志『お雇い独逸人科学教師』（青史出版、2015年）に詳しい。ここでは当該学校の沿革について主に同書に拠つつ、その上に中村の動向を重ねることで、中村のフランス語選択により導かれたその後の経緯について概観しておきたい。

江戸幕府のもとでの自然科学の洋学所は、幕末の安政3年（1856）に設立された「蕃書調所」から「洋書調所」に改称され、文久3年（1863）には「開成所」と改称された。さらに明治元年（1868）9月に「開成学校」、翌2年（1870：旧暦のため）12月には「大学南校」と改称された<sup>22)</sup>。

明治3年（1870）7月、明治政府から各藩主に貢進生制度が布告され、各藩から推挙された優秀な学生を給費により学ばせることになり、全国から310名の学生たちが大学南校に集まった。この時、英語を選択したのは219名、仏語が74名、独語が17名であった。

明治4年（1871）7月に、文部省が新設されると、同年に行われた廃藩置県により以後の各藩からの貢進生の見通しが立たなくなったことや、貢進生間の学力に差が生じ、授業に支障が出たり、脱落していく者が出たりしていることをうけて、貢進生制度に加え、大学南校自体も廃止となった。それに伴い、同年10月に「大学南校」は文部省所管となる「南校」と改称され、従来の貢進生以外にも広く門戸が広げられ、翌5年4月に改めて500名を募集する「南校」の選抜試験が実施されることになった。「南校」はいわゆる普通教育課程であり、語学、歴史、数学、物理学などの基礎教育を受け、その後に専門教育課程に進むことが想定されており、現在の中等教育機関にあたる。

同年11月に上京した中村精男は築地の明治協会でフランス語を学んでいたが、明治5年（1872）4月の「南校」の選抜試験により約440名が選ばれ、当時16歳の中村も翌5月、入学している。この選抜試験を経て残ることができた従来からの貢進生は約130名で、半数以上が振り落とされている。なお、中村が制度変更による南校への入学資格の門戸が開かれたまさにその時機を逃さなかったという点で、松下村塾在籍当時何らかの情報を得た上での上京であったことも窺わせる。

当時の南校は、いわゆる洋学の教育・研究機関だが、入学試験で外国語は課されなかった<sup>22)</sup>。むしろ、外国語や自然科学の専門教育を学ぶ土台として、選抜試験において主に漢学の素養が求められたとすれ

ば、松下村塾時代から馬島の賞賛を得ていた中村が、上京間もないながら選ばれたことにも首肯できる。

その後も、中村は同校の幾多の変遷とともに学生生活を送ることになる。明治5年8月には、「学制」が公布されたことに伴い、南校は「第一大学区第一番中学」と改称した。この時の全学生数は390名、英語176名、仏語129名、独語85名であった。

明治6年（1873）4月には、「開成学校」と改称。明治政府による大学構想にもとづく学校で、従来は英語、仏語、独語の3カ国語で行なってきた教育を英語のみとする方針を示し、英語クラスには法学、理学、工学の各学科が設置された。その一方で、将来的に廃止となる仏語クラスは諸芸学科、独語クラスは鉱山学科が暫定措置として設けられた。

明治7年（1874）5月の文部省令により、「東京開成学校」に改称。仏語、独語クラスは、英語クラスへの転籍や他学校への転校、自主退学が迫られたが、学校側は在籍している生徒のために暫定的に、仏語クラスに物理学科、独語クラスに化学科の開設を決定した。仏語物理学科（熱学・光学・数学・電気学・重力学・聴学）には43名が集まり、中村精男もそのうちの一人である。明治10年（1877）、「東京医学校」と統合して「東京大学」が発足した<sup>23)</sup>。

仏語物理学科は、明治11年（1878）から3年間の間に一期生から三期生まで20名の卒業生を出して廃止された。中村は、明治8年に入学し、同12年7月に東京大学理学部仏語物理学科を卒業したことになる<sup>24)</sup>。

なお、仏語物理学科の一期生、二期生、三期生は次のようであり、中村は二期生にあたる。

- ・一期生 櫻井房記、寺尾寿、中村恭平、千本福隆、信谷定爾、赤木周行（中退）、加瀬代助（中退）
- ・二期生 中村精男、鮫島晋、高野瀬宗則、難波正谷、田部梅吉、和田雄治、豊田周衛
- ・三期生 三守守、三輪桓一郎、小林有也、保田棟太、桐山篤三郎、澤野忠基、玉名程三、塩田仁松（卒業後、病没）

明治14年（1881）、当時22歳から29歳の彼ら仏語物理学科の同窓生（中退者2名含む）21名が、私立の夜間学校である「東京物理学講習所」を設立した<sup>25)</sup>。

このうちの一人である中村恭平（1855-1934）は、後に次のように述べている。

国家の大恩を受けて卒業したからには報恩の為め何か計画しようではないかの咄が出て夫れには当時世間に欠乏してゐる物理の知識を鼓吹

普及せしむることに力を尽すことが我々にふさはしき仕事ではないかと屢々寄合協議したる結果第一歩として公務の余暇を割て夜間の講義を開始し昼間勉学の暇なき青年等のためにもなれかしと明治十四年に物理学講習所を設けて授業を始めた<sup>24)</sup>

「国家の大恩」とは、彼らが国からの給費によって学ぶことができたことを指す。その報恩の具体化が、当時、本格的な理学を学べる教育機関は官立の東京大学しかなかったことに鑑み、彼らがフランス語で学んだ学問知識を日本語で教育還元し、理学のさらなる普及によって国の発展を期すことであった。

彼らを教えた東京大学理学部で唯一の日本人教授であった山川健次郎(1854-1931)の理解、尽力もあり<sup>注5)</sup>、大学で使用している高価な実験器具を毎回借り受けては夜間授業で使用することが許可され、それぞれが自身の公務をこなした上で、夜間に交替かつ無給で教壇に立って教え、授業後にはそのつど実験器具を大学に返却した。当初の授業科目は、物理学分野の「重力学」、「聴学」、「電気学」、「熱学」、「光学」と、数学分野の「算術」、「幾何」、「代数」であった。

物理学講習所の初代所長は櫻井房記(1852-1928)であるが、明治16年(1883)9月には「東京物理学校」と改称し、初代校長を寺尾寿(1855-1923)が務めた。その後、中村精男が明治29年から第二代校長を務めることになる<sup>25)</sup>。



図2 東京物理学校小川町校舎(東京理科大学蔵)

## 5 吉田松陰の影響の一端

中村の蔵書には漢学関係の書物も多くあり、若き日の詩作での馬島の賞賛などを踏まえると、当時の知識人の例にもれず高い漢学の素養を有し、文事にも長けていたことが分かる。

「是等の書籍は先生御在世中常に先生の御書齋に或は先生の御机の上に置かれてありました」<sup>26)</sup>とあるものを見ると、詩文では『唐詩選』、文章では唐・

宋代の名作とされる古文を収めた『正文章規範』、『続文章規範』といった類の他に、幕末長州藩の尊王攘夷派の僧で松陰との親交も深かった月性の詩文集『清狂詩鈔』、尊王の大義名分を守った忠臣が高く評価され松陰も愛読した頼山陽『日本外史』<sup>27)</sup>、幕末の勤王志士たちに大きな影響を与えた屈原など中国史上の八人の忠臣・義士を取り上げ、松陰の書簡にも頻りに登場する愛読書である浅見綱斎『靖献遺言』<sup>28)</sup>などが散見し、吉田松陰を強く意識した蔵書傾向が窺える。

さらに、吉田松陰自身の著述では、尊王攘夷の思想を記した『講孟劄記』や『幽室文稿』を座右に置いており、中村が吉田松陰の存在とその思想的な影響を強く受け、私淑していたことを知ることができる。またこの両書は、松陰直接の門下生で中村の義兄にあたる品川弥二郎が重んじ、『幽室文稿』にあつては編集に携わった書物であったことも影響関係を思わせる点で興味深い。

こうした蔵書傾向から窺える中村の尊皇的な面は、やはり吉田松陰とその直接の門下である品川弥二郎、馬島甫仙といった存在の影響が大きであろう。品川の影響やつながりの強さは、品川が中心となった京都における尊攘堂の保存運動に参画し尽力していることから窺える<sup>注6)</sup>。

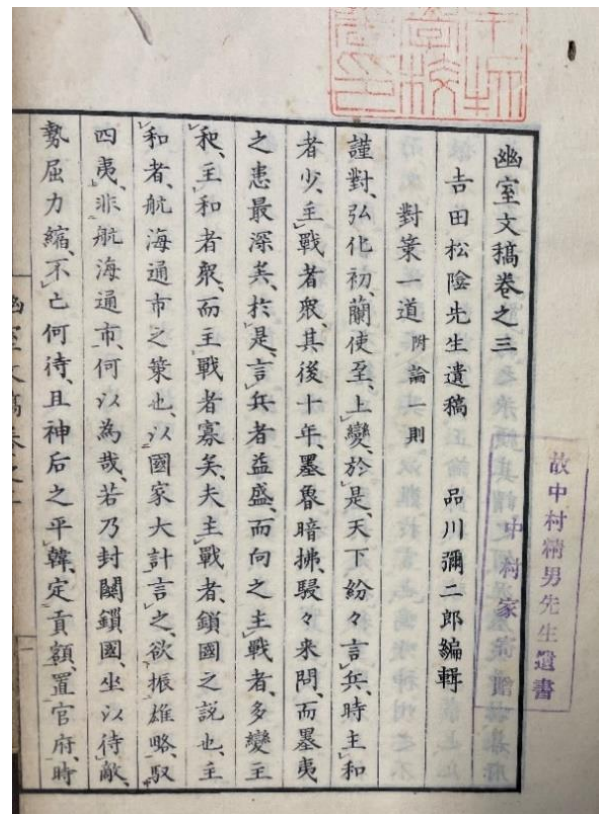


図3 中村精男蔵書の吉田松陰『幽室文稿』  
(東京理科大学近代科学資料館蔵)

そうした中村の思想的な面は、後の東京物理学校校長としての厳かで朗々とした教育勅語の奉読にもそれが表れている。物理学校における受業生の回想に次のように見える。

- ・先生の勅語捧読は実に天下一品であつた、寂た力の籠つた声、渺々たる海原を越し来る大波の様に悠々迫らざる抑揚と速度、莊重と云ふか、莊嚴と云ふかその声は林の様に静まり返つてゐる式場を圧して朗々と流れて行く、私は息塞まる程の感激をもつて謹聴した。あの莊重な音声は今尚ほ歴々とこの耳に残つてゐる<sup>29)</sup>。
- ・何と言つても校長の話ですれば必ず出て来るのは勅語であらう。……何故ならあの勅語をきいた人なら説明しなくたつて分つて居るし、きいた事のない人ならいくら説明したつて分らせる事は殆どむづかしい<sup>30)</sup>。

中村が教育勅語を重んじ、当時あるべき道徳心や人格の養成に力を注いでいたことは、次の受業生の回想からも窺える。

我物理学校にて教ふる所は教育修身を除く外は総べてが科学万能主義であるが先生は常に人格の養成に心を注がれて居つた母校毎年の始業式にて我学校の教育方針は専ら教育勅語を能く体得してこれを実行するにある又先輩は着実剛健で職務に忠実であつたことを説きて新入生を指導せられた<sup>31)</sup>。

そして、それが吉田松陰の影響を強く受けたものであつたことも、物理学校関係者には次のように広く浸透していたようである。

実に理化学の如き物質文明を重んじ之が研究助長をなさんと欲するものは大に此の人格的修養に三思四考し、極めて細心の注意を要する所なり。我が先生の円満なる未曾有の大人格はよく此弊風を我校门より駆逐することを得たり。是れ先生が幼時松下村塾より得たる報国尽忠の大精神の発露によるものにして、千歳の後までも邦家を大磐石たらしむると断言するをも憚らざるなり<sup>32)</sup>。

そもそも中村自身の尊皇的な思想は、吉田松陰や松下村塾の影響のもとに生涯一貫したものであつた。国家があることの恩に感謝するとともに、それぞれが置かれた立場でその恩に報いていくことを若者に期待したのは、先に触れた中村を含む仏語物理学の同窓生 21 名が東京物理学講習所を設立した際の、「国家の大恩を受けて卒業したからには報恩の爲め何か計画しようではないか」という当初の思いを、後世につなげようとした実践の表れでもあろう。

さて、明治 14 年における東京物理学講習所の設立広告には、その理念を次のように述べている。

輓今吾邦の文運駸々乎として駟馬も猶ほ及ばざるの勢あり。而独り理学の諸学科に至つてハ之を法文学の諸学科に較ぶれば其進歩の遅速霄壤の差異なきことあたハざるなり。夫理学科ハ法文学科等の如く単に書籍のみに由りて其真理を洞解すべからず必ずや試験観察等実地に就きて之を研究することを要すべし。而るに今や官立大学校の外ハ未だ適切なる理学校の設甚多からざるが故に世人大率學術の本旨と其利益とを覚知することあたはず却て之を蔑視するの弊風あり。且つ理学を修むるものといへども亦往々誤謬の見解を懐くを免れず。是れ蓋し理学科の特に著しき進歩を為さざる所以なり。生等窃に此に憂ふところあり。共同戮力して以て公益の爲に一学校を設立し専ら試験に由りて最簡易に物理の諸学科を講明せん<sup>33)</sup>

「書籍のみ」に拠らず、「試験観察等実地」に重きを置く学校設立の理念は、無論理学教育において前提となるものではあるが、空理空論を嫌い、実物教育にも力を入れたことは吉田松陰にも相通ずるものがある<sup>注7)</sup>。ちなみに、中村が実物教育を重んじていたことについては、次のようなエピソードが残る。

先生が科学界上に於ける最も卓越なる識見を仰望し得るは、先生の海外より帰朝せらるゝ毎に必らず実物を持ち来りて吾人に指示せられ、所謂百聞は一見に如かざる底の真理を高調せられたることなり。例せばリップマン原色写真の如き、又は弗化水素による刻度印記特許法を実地修得する事、或は水化カルシウムの見本実物教育の如き或は外国雑誌中より種々の薬品にて黄金を製造する方法を示されたる如き其他枚挙するに遑あらず<sup>34)</sup>

志さえあれば誰もが高い水準の理学教育を受けられるという点で、東京物理学講習所設立の理念は、吉田松陰に私淑し、松下村塾出身者でもある中村の内的動機としても十分なものがあつたと思われる。

中村が担当した授業は、受業生の回想に出てくるものを拾えば、「光学」、「熱力学」、「地球物理学」、「幾何」などであつた。物理学校初期の受業生による次の回想は、教壇に立つ中村の人となりの一端を伝えてくれる。

教室も小さかつたし、クラス人員も少なかつた上に、静かな故校長先生のお講義は、実にしみりした研究の時間でした。ほんとうに勿体なく感じてゐました。先生は絶えて一度も、原稿

や教授草案らしいものは御持ちにはなりませんでしたが多くは御紹介なさる位でお開きになったことさへなかつたやうに記憶してみます。すべては先生のアタマの中から順序正しくスラスラと繰り出されるのでした。大抵、先生は教卓の正面に於いて御講義になります。時折込み入った解説になるとその教卓の上へチョークで図示しながらお話になりました<sup>35)</sup>。

次の回想からは、校長として70歳を過ぎてなお教壇に立ち受業生と向き合う中村の矍鑠とした姿が伝わってくる。

初めての授業の日である、私達は新しい先生殊に学校の創立者である校長を迎へると云ふ感激を交へた好奇心から、いつになくひつそりと静まり返つて授業の始まるのを待つてゐた。静かな靴音が廊下に響いて、あの小さな扉が音もなく開いてそこに入つて来られた校長は数歩の距離にある教壇に悠然と上ると区区な私達のお辞儀に答へて如何にも老人らしい人の好い微笑を漂はせて私たちを眺めてゐる。何を話し出さうとするのであらう、すらりとした長身、それは決して古稀を過ぎた老人とは思はれない程立派なものである、上品な細面に高い鼻、翼を展げた様な大きな耳、光こそ鈍つて居れ深い慈愛の籠つた瞳、鳳仙花の様に垂れた下脛、神々しい迄に白い髭の下には薄墨色を含んだ唇が軽く結ばれ、其の両側に高齢者特有な曲線をなして頬肉がたるんで居る、後頭部に僅かな白髪を残して奇麗に禿げた円満な頭顱、それ等は総て先生の温雅にして深厚な人格の表象であり見るからに尊敬の念を起させた<sup>36)</sup>。

また別の日の講義で受業生とのやりとりを楽しむ中村について、次のように回想している。

また今思ふとこんなこともあつた、淡々として水の如き講義の中に如何にもユーモアな調子で「日本人の髪は温度計に使ふには都合が悪い、西洋婦人の金髪がイゝ」と云はれると珍らしく相好を崩して笑はれた、それで私達が一斉に「ワアー」と囃し立てると又これに和して大きな口を開けて笑はれたが其の天真爛漫、愉快な笑にこぼれ童顔はいまだに眼前に髣髴として口辺自ら微笑の上るを禁じ得ない<sup>37)</sup>。

中村精男の後任として校長を務めた中村恭平は、その人となりについて次のように述べている。

君は温厚の長者で慎重の人であつて決して軽率な言行をしなかつた、学問の研究に於ても忠実

で微細な点まで能く注意し秩序整然たる方法を執られた、社交的に至りては誠に穩かで落着いて抜目なく且礼儀正しく最後まで激情を發するやうなことは決してなく何人に対しても親切であつた、又君は性来酒は一滴も飲まず去りとて甘党でもなく間食もなさず誠に行儀善く趣味としては喫煙と時にヘボ将棋をなす位で隠し芸等は皆無のやうであつたし常識には富だ人でしたから決して埒外に逸し奇矯の行ひを為すと云ふやうなことはなかつた従つて奇談逸事と云ふやうなことは割合に少いやうである<sup>38)</sup>。



図4 中村精男写真（東京理科大学蔵）



図5 明治42年卒業写真（前方2列目・右から3人目）、中村精男の授業風景イラスト（右下）（『東京物理学校八十年略誌』、東京理科大学提供）



こうした縁のある人々による回想は中村の人となりをよく伝えてくれており、教育に対しても強い内的動機を有していたことを窺わせる。そこには中村自身による吉田松陰への私淑や、松下村塾出身者であることの矜持といった意識が影響していたように思われるのである。



図6 東京物理学校神楽坂校舎（東京理科大学蔵）

#### 参考文献

- 1) 井関九郎『現代防長人物史（地）』（発展社，1917年），末弘錦江『防長人物百年史』（山口県人会，1967年），吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』（マツノ書店，1976年）。
- 2) 『東京物理学校同窓会会報』（以下『会報』）第十二号「中村精男先生追悼記念号」、『東京物理学校五十年小史』（東京物理学校，1930年），『東京理科大学百年史』（東京理科大学，1981年）。
- 3) 馬場錬成『物理学校』（中公新書ラクレ，2006年），159頁。
- 4) 『第五回内国勲業博覧会審査官列伝』前編（金港堂，1903年），71頁。前掲『会報』第十二号，11頁。
- 5) 中村精男「陸軍大臣岡市之助君の幼年時代」（『成功』27(3)，成功雑誌社，1914年）。
- 6) 「馬島に与ふ」（『吉田松陰全集』第五卷，大和書房，2012年新装版），131頁
- 7) 「跋夏日山居詩后」（『桜山遺草』所収，萩市立萩図書館蔵）。
- 8) 前掲『桜山遺草』所収。
- 9) 海原徹『松下村塾の明治維新』（ミネルヴァ書房，1999年），12頁。
- 10) 福本義亮『吉田松陰之殉国教育』（誠文堂，1933年），594頁。
- 11) 「中村精男先生略伝補遺」（前掲『会報』第十三号，昭和6年5月）。
- 12) 前掲『第五回内国勲業博覧会審査官列伝』前編，71頁。前掲『増補近世防長人名辞典』，171頁。
- 13) 拙稿「近代造船の先駆者・渡辺蒿蔵—幕末長州藩における海事志向の影響を踏まえて—」（『大島商船高等専門

学校紀要』第51号，2018年）。

- 14) 『吉田松陰全集』第4巻，349-350頁。
- 15) 金子久一編『松陰門下の最後の生存者渡辺翁を語る：昭和十五年三月七日渡辺翁追憶座談会速記録』（萩響海館，1940年），86頁。
- 16) 飯田史也「幕末・明治期におけるフランス語教育に関する研究—公的教育機関と私的教育機関—」（『福岡教育大学紀要』第46号第4分冊，1997年）。
- 17) 吉田庫三「吉田松陰先生」（『日本及日本人』第495号所収，明治41年復刻版，マツノ書店，2000年，26頁）。
- 18) 『高杉晋作史料』第二巻（マツノ書店，2002年），88頁。
- 19) 前掲16。小野雄司「横須賀製鉄所附設饗舎科学技術理工教育と近代造船学」（『日本造船学会誌』870(0)，2002年）。
- 20) 三宅紹宣「吉田松陰の教育論」（『至誠館大学吉田松陰研究所紀要』4，至誠館大学吉田松陰研究所，2022年）。
- 21) 同上。
- 22) 『東京大学百年史』部局史二（東京大学，1987年），333-334頁。
- 23) 前掲『東京物理学校五十年小史』，『東京理科大学百年史』，『物理学校』参照。
- 24) 前掲『会報』第十二号，2頁。
- 25) 前掲23。
- 26) 前掲『会報』第十二号，71頁。
- 27) 北影雄幸『吉田松陰の愛読書を読む』（勉誠出版，2014年），90-96頁。
- 28) 同上，31-34頁。
- 29) 前掲『会報』第十二号，46頁。
- 30) 同上，21頁。
- 31) 同上，42頁。
- 32) 前掲『会報』第十三号，15-16頁。
- 33) 「郵便報知新聞」（明治14年6月13日）。
- 34) 前掲『会報』第十三号，16頁。
- 35) 前掲『会報』第十二号，33頁。
- 36) 同上，47頁。
- 37) 同上，48-49頁。
- 38) 同上，2頁。

#### 注記

注1) 熊野敏三は、明治8年（1875）司法省派遣留学生としてパリ大学に入学し、同16年（1883）に法学博士号を取得した。帰国後は司法省参事官や大審院判事などを務め、明治27年（1894）の退官後に弁護士登録し、翌28年（1895）からは東京弁護士会会長を務めた。大久保泰甫「明治初年、パリ大学法学部日本人学生の留学記録（一）」（『東京大学史紀要』16，東京大学史史料室，1998年）、七戸克彦「現行民法典を創った人びと6 木下広次・熊野

敏三」(『法学セミナー』54(10)(通号 658), 2009 年 10 月) 参照。

- 注 2) 茂住實男「明治前期中・高等教育機関と英語」(『HiSET Journal』5, 日本英語教育史学会, 1990 年) に 抛れば、当時の南校の入学試験科目において、英語をは じめとする外国語が課されることはなかったようである。
- 注 3) 戦後の新制における現在の東京大学とは異なるため、 区別して「旧東京大学」と称することもある。
- 注 4) 諸書には「東京帝国大学」を卒業したと見えるが、 厳密には「帝国大学」と改称したのが明治 19 年、「東京 帝国大学」と改称したのは、「京都帝国大学」が設立され た明治 30 年である。
- 注 5) 山川健次郎の経歴や学問については、岡本拓司「山 川健次郎のアメリカ留学—日本の物理学の黎明—」(吉見 俊哉・森本祥子編『東大という思想—群像としての近代 知—』所収, 東京大学出版会, 2020 年) 参照。
- 注 6) 京都帝国大学附属図書館編『尊攘堂誌』(京都帝国 大学附属図書館, 1940 年) 参照。尊攘堂は、幕末の勤王 志士を顕彰し、その肖像や遺墨を保存するため、吉田松 陰の遺志を継いで明治 20 年に品川弥二郎が自邸内に建 造した。その後、移転新築し、現在は京都大学構内にあ る。中村精男も主たる賛同者の一人である。
- 注 7) 一例として、『松下村塾零話』(『吉田松陰全集』第十 卷) に、「先生の歴史を読まるるには常に地図に照合し、 古今の沿革彼我の遠近を詳かにす。依つて地理に精通せ り」(345 頁) とある。